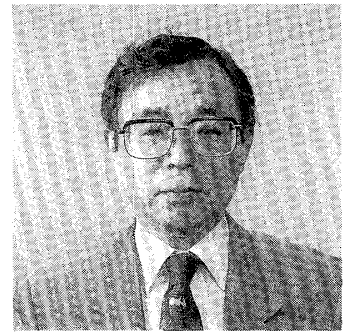


# 注目を集めるカスピ海の エネルギー資源

石油資源開発株式会社  
専務取締役

島中 杉夫



カスピ海周辺の諸国が石油・ガスの新しい供給地として注目を浴びている。カスピ海は5つの国に囲まれている。北にロシア、南にイラン、西にアゼルバイジャン、そして東にカザフスタンとトルクメニスタンがある。このうちアゼル、カザフ、トルクメニスタンはソ連邦崩壊後に独立した共和国である。この3カ国はもともと石油やガスの豊富な地域であったが、その生産物はソ連内で消費されたり、ロシア経由で輸出されていたため、西側諸国との直接取引はなく、知名度は低かった。もっともアゼルバイジャンのバクー油田は19世紀の後半からノーベル一族などによる開発が行われ、一時は世界の石油の半分を生産するほどの重要性を有していた。ソ連時代になっても増産は続き、1970年代には日産約35万バレルとなる。しかしソ連の石油政策の重点目標が西シベリア地方に移されたため新規開発が遅れ、生産は減退する。また陸上油田が涸渇し、海上に力点が置かれるようになったが、海上掘削の技術レベルが十分でなく、思うように増産が進まなかった。さらにソ連邦崩壊後は旧ソ連圏の需要が激減し、アゼル国内も内戦で経済が停滞したため、1995年の生産は75年の半分にまで落ち込んだ。

ソ連邦崩壊の影響はカザフやトルクメニスタンでも同様である。カザフでは1991年に日産53万バレルだった石油の生産が95年には41万バレルに落ち込んだ。トルクメニスタンは年800億 $m^3$ ものガスを主としてウクライナに出していたが、独立後ウクライナが代金を払わないため輸出をストップしてしまった。

これら3国は石油・ガスの増産に関して2つの共通な悩みを抱えている。1つは技術と資金の欠如、もう1つは搬出路をロシアに押さえられていることだ。石油・ガスを西欧にパイプラインで輸出しようとしてもロシアが自国の石油・ガスを優先して通してしまう。第1の問題に対応する方法は外資の導入である。カザフスタンはテンギス油田に外資を受け入れた。この結果、生産の回復に寄与しただけでなく、外国企業の母国の圧力でロシアにより多くの石油を通させることに成功した。アラル海近辺やカスピ海浅海部でも外資による開発が計画されている。

アゼルバイジャンも大々的に外資導入を図っている。まずグナシリ、シラグ、アゼリというオフショアの油田を開発するため、アモコ、BP、アゼル国営石油など、12企業によるジョイントベンチャーが結成された。企業の国籍は米、英、アゼル、ロシア、トルコ、サウジなど8カ国で、日本からも伊藤忠が参加している。この3つの油田は、じつは1つにつながっているとされており、構造全体の大きさは東京都とほぼ同じ、埋蔵量は確認されているだけで40億バレルという巨大なものだ。昨年末から生産が開始され、ピーク時には日産70万バレルに達するものと見込まれている。アゼル政府と操業会社 AIOC との間で1994年秋に結ばれた契約は「世紀のコントラクト」と呼ばれている。この後もアゼル政府はイタリアのアジップ、フランスのトタル、エルフなどと探鉱・開発契約を結んでおり、これらがすべて成功すれば2010年過ぎには日産が100万バレルを超える

ものと期待されている。

9月下旬、石油開発情報センター主催の「中央アジアミッション」に参加し、トルクメニスタンとアゼルバイジャンを訪問する機会を得た。

アゼルバイジャンは「火の国」という意味で、紀元前から石油やガスが湧き出ていたらしい。それらが自然発火したものを神として崇めたのが拝火教だという。今でもバクーの郊外には復元された拝火教の寺院があり、ガスの火が燃えている。バクー油田は西欧の人々によって開発されただけに、ヨーロッパの街、例えばマルセーユのような面影が残っている。石畳の道が海に向かう坂になっており、そこをカスピ海から風が駆け上がってくる。バクーは「風の町」ということらしい。

AIOCプロジェクトの油田をヘリコプターで見学させてもらったが、さすがに雄大な規模である。これだけのプロジェクトを3年という短期間で立ち上げるのは異例のことだとAIOCの社長は自賛していた。特にこの国は内陸国なので資材や機械の搬入が容易ではない。黒海まで船で運び、それから先は大きいものは運河やボルガ海をバージで、小さいものは汽車で搬入するのだという。綿密な計画に沿って運び込まれたものがバクーの南にある広大なストックヤードで組み立てられ、海上の現場に持ち込まれる。ロジスティックの重要性を改めて感じさせられる。

しかしプロジェクトが成功したとしても100万バレルもの油をどうして輸出するのか気になるところだ。今のところ、ロシア領を通過して黒海に出す北ルートパイプラインと、グルジアを通過して同じく黒海に出す西ルートとが考えられている。北ルートは既存のものだが紛争地域のチェチェンを通るという問題がある。グルジアの方は未完成部分がある。また黒海に出したとしてもボスフォラス海峡がネックになる。そこで考えられているのがグルジアの途中から南下してトルコの地中海側に出すルートである。アゼルだけでなく将来カ

ザフの石油も入ってくればこのルートが本命になるだろう。いずれにしても紛争の多い地域を通過するので米、露、英、仏といった大国の企業やトルコ、サウジ、イランの企業まで呼び込んできたところに小国のしたたかさがうかがえる。またアメリカはアゼル政府がアルメニア系の人々を弾圧しているという理由で禁輸措置の対象にしていたが、米企業の進出が決まるとこの措置を撤廃し、元KGB長官のアリエフ大統領をホワイトハウスで歓待したのである。あまりにも現金だという気がするがこれが国益というものであろうか。

アゼルバイジャンに来る前にトルクメニスタンのアシガバードを訪れた。わずか1日足らずの滞在であったが、石油・ガス担当の副首相をはじめ政府の要人に会うことができた。トルクメニスタンは現在のところ貧しい国で、綿花とガス以外にはめばしい産業はないが、エネルギー資源のポテンシャルは極めて高いものとみられている。ある西側の専門家は、トルクメニスタンのガス・石油の埋蔵量はアゼルやカザフよりも大きく、メキシコ湾や北海に匹敵するものとみている。トルクメニスタン政府関係者はさらに楽観的で、ガスは700兆立方フィート、石油は460億バレルという数字もある。しかしトルクメニスタンの外資に対する政策は慎重で、今のところ有力な西側の資本は参加していない。また搬出ルートについても、パキスタンへのガスパイプライン、イラン、トルコ経由での西欧へのパイプラインなどが検討されているが、実現までには多くの問題がありそうだ。

いずれにしても、カスピ海周辺国のエネルギー資源に対する期待は膨らみつつあり、この期待が現実のものとなれば世界のエネルギー事情に少なからぬ影響を与えるであろう。そのためには、この地域の政治的安定と先進国からの資本導入が不可欠であり、日本の政府や企業に対する期待も大きいものがある。